

日本における文学場

——明治後期～大正時代における文壇状況を手掛かりとして——

京都大学大学院教育学研究科 助教 椎名健人

1. 先行研究と目的・問題意識

この報告の目的は、日本における「文学場」の形成とその性質について、社会学的観点から明らかにすることである。

本発表の主要なテーマの一つである「文学場」の成立に関する理論枠組みの研究としては、P.ブルデュー『芸術の規則』が19世紀半ばのフランスにおける文学者たちの分析を通して今日まで続く、外部から隔絶され自立した独自の価値体系を共有する芸術家たちのサークルについて「場」という概念を用いながら明らかにしている。

日本の文学者を扱った文献の中で比較的ブルデューの研究に近いものとしては、山内乾史の『文芸エリートの研究』が明治維新直後から昭和初期において文壇内で活躍した作家たちを「文芸エリート」と定義付けた上で、「文芸エリート」たちの出身地、出身階層、学歴などの数量的特性を分析することから近代日本における文芸の性格を明らかにしようと試みている。ただし山内の研究はあくまで数量的なものに留まっており、「場」そのものの成立や交友関係、師弟関係をはじめとする文学者たちの具体的な関係性を扱ったものではない。

そこで本発表では、ブルデューが用いた文学場に関する大きな枠組みを用いながら、日本で明治30年代から昭和初期にかけて段階的にその形成と自律化を完了させた文学場の成立について、主に当時の文壇内部における社会的ネットワークの分析を軸に考察する。

2. 方法

本発表では、我が国で1905～1910年頃に成ったアカデミズムと結びつく形での文学場の権威獲得から、1910年代における職業としての作家業の本格的成立、1920年代から1930年代における文学の大衆化と文学の芸術性をめぐる論争などの推移を観察した。

3. 結果・考察

分析の結果、まず1905年～1910年頃の文壇においては、漱石、鴎外、荷風、藤村、敏など、外国語文学の学者・知識人が多くを占めていることが観察され、この時期は西洋に学んだ知識人の活躍により、アカデミズムと文壇が融合する形で日本の文学場が権威を獲得しつつあった時代であったことがわかった。

続く1910年代前半は日本における文学場の形成がある程度整った時期にあたり、この時期の文壇においては第2次『新思潮』・『白樺』などの文芸同人誌から文壇に進出した谷崎潤一郎、志賀直哉らアカデミズムを経由しない近代小説の書き手が多く登場していることがわかる。

また1920年代から1930年代にかけては円本ブームを契機とした出版好況やそれに伴う原稿料の値上がり、並びに芥川・谷崎論争及び芥川賞・直木賞の制定に代表される「文学の芸術性・娯楽性」の定義の明確化などが立て続けに起こり、より多面的な意味合いにおける文学場の自律化が観察された。

4. 文献

三好行雄『近代文学史の構想』（筑摩書房、1993年）

P.ブルデュー『芸術の規則Ⅰ・Ⅱ』（藤原書店、1995-1996年）